

体の距離と心の密

— 子どもたちの自己肯定感を考える その10 —

1 子どもたちの我慢も限界

コロナ騒動も早1年が過ぎた。三密回避行動が日常化する中で、人と自由に会えず、楽しい会食やスポーツ、観劇や旅行といった、生きる喜びを分かち合い、生きる辛さを癒し合う、かけがえのない触れ合いタイムを奪われて久しい。

学校に集う子どもたちも、緊急事態宣言で分散登校が再開、部活はできず、生活リズムがとれず心身の疲弊は積み重なって、コロナストレスがコロナ鬱へと変容しつつある。

今や彼らの堪忍袋はパンパンに張って、爆発寸前である。ストレス耐性袋の大方がコロナで占められ、他の日常ストレスが重なれば、たちまち問題行動として顕在化する。多感で不安定な発達ステージを、ガラスの心で生きる彼らの辛抱は、限界にきている。

私が勤務する都立高校でも、個別面接続きで、昼食が夕方になってイブニングランチになる日も珍しくない。十代の自殺、それも女子高校生の自殺急増の中で、破綻を招かないよう養護教諭や担任教師らと綿密に連携をとりながら、注意深く支援を続けている。

2 リモート授業の顛末

このコロナ禍で大学もリモート授業中心となった。私のクラス133名の学生に対して、非対面でどれだけの教育ができるのか、当初は非常に不安だった。

実際に始めてみると、時間がいくらあっても足りないと感じる一方で、活用次第で学生に寄り沿った指導ができることを実感した。心理不安からか薄い内容の論文を提出する学生も当初散見されたが、彼らに潜在する良き資質や努力と進歩の跡を見つけ、それらを明確化してフィードバックに努めた。それは効果てきめんだった。次第に、学生たちも腰が入り、集中して取り組み出した。資料もよく読み深く考えて、オリジナリティに富んだコクのあるレポートを、提出するようになっていったのである。

個別交流の授業展開の様相となり、このやりとりは結果的に、コロナ禍で不安をかこつ学生たちに、潤いを与えメンタルの安定を図る営みにもなったと考えられる。彼らの授業後の感想の一部を紹介したい。

「自粛期間中は、今やっていることに意味がないような気持ちで不安になったり、何が正解かわからなくなったりしたが、この授業で大学にきた理由や、就きたい職業

に向けての初心の心を思い出すことができた」(NAさん)

「仕事に対する可能性や視野が、一気に広がりました。毎回の課題に対する先生の返信もとても丁寧で、一人ひとりしっかりと、確認してくれているんだなと思い、毎週返信を楽しみに課題を頑張ることができました」(NRさん)

「キャリアデザインの授業を通して、まず自分に自信がついたこと、そして将来に期待が持て、自分で何かをやってみようと思えるようになったことが一番大きな変化であった。毎授業ごとに下さる心のこもったメッセージ、私たちの状況を理解し、認めてくれる居場所のようなものを作ってくださった先生に感謝します」(TSさん)

最後のTSさんは、「先生の返信に、いつも心が救われています」と記してくれたこともあった。それほど、学生たちはコロナ禍で心理的に追い込まれていたのだろう。

多様性と連帯感を育む集団ワークはできずとも、学生個々のキャリア開発は進んだ。大量のレポート読破に追われた日々も、彼らのがんばりとコメントのおかげで、私も救われ、報われた思いである。

3 体の距離を取りながら、心の密をどう保つのか?

子どもは本来、密な関係を通して成長するものである。集い群れる中で、共感能力や優しさが身につく。また仲間との共同の学びを通して、協力連帯等の社会性を獲得する。

何より、乳幼児期の母親の抱っこは、人への信頼感を培う重要な密接交流である。それは、生きる原動力である自己肯定感の芯を形成する。養育者との一貫した密な情緒交流がなければ子は育たない。それは英国心理学者ハーロウの実験やイスラエルの農業共同体キブツでの子育てから周知の事実である。母親がコロナに感染し、数週間子どもと引き離される体験は、愛情剥奪と言える。愛着対象を奪われた衝撃は負の痕跡として、青年期以降の人生に暗い影を落としかねない。

今、口元や表情が読めないマスク姿の保育士の下で、園児の言葉や感情の獲得が遅れがちと言われる。また給食を黙って取る黙食や、一列で黙り下校する等の現象が、公立学校で広がっている。

小さい子ほど、密を避ける新たな生活様式は負の影響が大きい。飛沫防止の肉体距離を取りつつ、どう心の密を保っていくのか——？ われわれ大人が、今そのことを切実に問われている。